

アフリカ訪問の最大の魅力

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

高温多湿の日本の夏は蒸し暑く、幼児や高齢者ならずとも体調を崩しやすい季節です。

ところが、私がライフワークとして定期的に足を運んでいる東アフリカのケニアやタンザニアでは、日本のような四季がありません。乾季と雨季とが、一年に二回ずつ巡ってきます。一般的に日本人の持つアフリカのイメージは、灼熱の大地、密林、砂漠地帯という言葉で表現されることが少なくありませんが、それはごく一部の地域をさしているものであって、ケニアやタンザニアを例にあげてみますと、湿度が低く乾燥しており、汗をかくことはごく稀です。両国とも赤道直下に位置し、インド洋に面していますが、国土の大部分は軽井沢の夏のように快適で過ごしやすい、海拔 1,000 メートルから 2,000 メートルの高原なのです。

特に日本が最も暑い 7 月から 8 月にかけて現地を訪れる際には、長袖の衣類や防寒用のスカーフ、上着を忘れたら、風邪を引いてしまいます。

現地では「一日のうちに四季がある」という表現をします。朝晩は地域によって摂氏 10 度を下回り、厚手のセーターや皮のジャンパーを着たり、毛糸の帽子をかぶる人も

います。太陽の光が降り注ぐ昼間でも、カラッとしているので、日陰に入ったとたんにヒンヤリと心地良い風が吹いてきます。

このような気候の中で暮らしている野生動物たちがうらやましいと、私はいつも感じます。

現地では日本の動物園やサファリパークとは反対に、人間が“車という檻”に乗って、自由に広い草原(サバンナ)を歩き回る野生動物の中にお邪魔し、写真を撮ったり、行動を観察する仕組みです。

大阪府とほぼ同じ面積や、四国よりも大きい国立公園があるケニアやタンザニアでは、野生動物との出会いは、まさに一期一会です。これまでに通算 28 年、100 余回に渡るサバンナでの出会いの中で、一度だけし



写真1 火口原に暮らすヌーの大群

か出会ったことがない貴重な動物、それはタテガミヤマアラシ（英語名はCrestedPorcupine）です。

タテガミヤマアラシはアフリカに住む齧歯類の中で最大で、その行動は夜行性のため、出会うことができる確率は非常に低いのです。

世界自然遺産に指定されているタンザニアのンゴロンゴロ（Ngorongoro）は、昔からこの地域に暮らす遊牧の民、マサイの言葉で“大きな穴”という意味ですが、それもそのはず、100 万年以上昔に火山の度重なる噴火によって生まれた火口原（クレーター）なのです。大きなすり鉢のような地形の、ンゴロンゴロ火口原の直径は16～19キロメートル。東京都内を走る JR 山手線の内回りとはほぼ同じ大きさに相当します。

この中ではキリンを除く主要は乳類や鳥類、植物を見ることができます。もちろん人間の手を加えず、誰からも餌を与えられない野生動物たちは“弱肉強食”の掟に従って毎日を真剣に生きています。

タテガミヤマアラシとの出会いは、まったく期待をしていなかったのですが、突然



写真2 夢中で獲物を食べる
タテガミヤマアラシ

やってきました。私たちを乗せたサファリカーのドライバーガイドが、運転しながら左前方を指差しました。その方向を見ますと、何かが上下に揺れていました。

「何だろう?」と不思議に思いながら車を近づけていったところ、それが“珍獣”のタテガミヤマアラシだったのです。夜行性の動物に白昼出会えるわけがない、と我が目を一瞬疑いましたが、それは正真正銘のタテガミヤマアラシ。

長年「会いたい、見たい」と思っていた相手がすぐ近く、手が届きそうなくらいに近いところにいる、という幸運に感謝せずにはいられませんでした。

カメラを構え、少しずつサファリカーの位置を変え、何度も何度もカメラのシャッターを押しました。タテガミヤマアラシは野ネズミのような小動物を捕らえ、脇目もふらずに食べているところでした。そのお陰で、じっと同じ場所で時折背中を鋭いとげを上下させるタテガミヤマアラシの姿を、心ゆくまでフィルムと自分の目に焼きつけることができました。

アフリカ訪問の最大の魅力、それは作り物ではない本物と出会う可能性です。予測ができないだけに、何回訪れても毎回初めてのように新鮮な気持ちで出掛けることができるのは、ほんとうに嬉しいことです。